



ふるうち こうたろう
1963年東京生まれ。外資系保険会社勤務時代に慶応義塾大学大学院経営管理研究科修了(MBA取得)。2005年燦ホールディングス入社。09年から現職。

東日本大震災の被災者の心のケアが重要なテーマに掲げられるようになってきた2011年4月7日、大阪市内のホテルで書籍『グリーンケア』の出版記念会が開催されました。グリーンケアの専門家や医療関係者、そして市民団体の活動家が一堂に集まりました。

『グリーンケア』の副題は、「見送る人の悲しみを癒す「ひだまりの会」の軌跡」です。本書はグリーンケアの重要性を世に問うと同時に、葬儀会社である公益社(大阪本社)が7年前から取り組んでいる遺族サポート「ひだまりの会」の活動記録でもあります。グリーンケアの定義は、また専門家の間でも定まっていませんが、グリーンは「深い悲しみ」の

意味を持つ英語「Grief」で、「グリーンケア」とは、両親や子ども、伴侶といった最愛の人との死別の悲しみから立ち直れないでいる人への支援を意味するものです。ホスピス・緩和ケアなどでは身近なものではないでしょうか。ただ、葬儀会社を取り組んでいるケースはあまりに存知ないかもしれません。公益社が、グリーンケアを目的とした遺族サポート「ひだまりの会」を設立したのは、2003年12月のことです。会員となった遺族が集う「月例会」から始まりました。

月例会は、グリーンケアの専門家による講演と分かれ合いの二部構成で行われています。「分かれ合い」とは、遺族が数人ずつの小グループに分かれ、各自の死別体験を語り合うことで、グリーンケアの核として位置付けています。しかし、遺族が直面している悲嘆は一樣ではありませんし、時間とともにそのあり方も変わってきます。私たちは活動を始めて間もなく、遺族の悲嘆のプロセスに合った工夫が必要だと感じました。

遺族の心に寄り添う

——ひだまりの会の軌跡

第1回

会員から意見を聴く中で、浮かび上がってきたのが「ライフサポート」というキーワードです。

長期的視野で遺族を支援

私たちの活動において「グリーンサポート」と「ライフサポート」は、いわば車の両輪です。死別の悲嘆に向きあう(故人中心の生活)から、人生の豊かさに目を向けた(自分中心の生活)への移行を支援する——長期的視野に立った遺族サポートの必要性を実感したのです。それを具体化したのが「分科会」活動です。

分科会は、遺族(有志)が中心となって行う活動です。これまでに「シルバー元氣塾」「傾聴ボランティア講座」「人生の後始末相談会」「わいわい食堂」などが行われてきました。

中でも一番人気の「わいわい食堂」は代表的な自主活動といえます。参加者が食事をつくり、わいわいがやがや、おしゃべりをしながら食べることが趣旨のこの分科会は、遺族の社会的交流の場となっています。特に、妻に先立たれた男性会員などには、調理技術の習得や食生活・栄養管理を改善するよい機会ともなりました。

ひだまりの会の活動を支援していただいている龍谷大学短期大学部黒川雅代子准教授は会の優れた活動に「見守りコール」をあげています。見守りコールとは、分かれ合いの後、日をおいて、同会のスタッフが遺族に電話をすることです。遺族は、分かれ合いに参加したから元気になるには限りません。自分の苦しい死別体験に向き合うわけですから、参加したばかりに、かえって辛くなった、二度と

行きたくないというケースもあるのです。そのように心が揺れ動いている時にスタッフから電話が入ると「また行くのかな」という気になる可能性が高まります。「ひだまりの会」事務局では、2006年、同会に参加した247名の会員を対象に、アンケートを行いました。

死別後の心の支えとなったものを挙げてもらったところ、「家族」が69・9%と最も多く、次いで「友人」57・3%。そして「ひだまりの会」が48・4%でした。「ひだまりの会」が、遺族の心の支えとして「家族」「友人」に次いで挙げられたことは、同会の存在意義を示すものとして、大変勇気づけられました。

さて、設立から8年目を迎える、会員数は600人を超える規模にまで拡大しました。現在、少し元気を回復した会員のための「ひだまりサロン」をNPO法人「遺族支え愛ネット」に運営委託して開催しています。これは、悲嘆から立ち直った遺族のライフサポートのために、会員有志が立ち上げたボランティア組織です。そして、これこそ究極のグリーンケアと言えるかもしれません。

次回からはこれらの活動を詳しくご紹介していきます。(燦ホールディングス・公益社代表取締役社長・古内耕太郎)



癒しから豊かな人生まで